第3部 大学事例報告（2011年度）

産業能率大学

「入試選抜ルートの違いからみた学生のジェネリックスキルをPROGテストで検証」

産業能率大学
入試企画部長
林 巧樹

[2011年11月4日 東京リクルートGINZA8ビル]

1. はじめに

(1) キャリア教育とは

今日の私のテーマは「入試選抜ルートの違う学生のジェネリックスキルとPROGテストに関して」ですが、その前にキャリア教育についてお話ししたいと思います。

私は1997年に入試センターに移る以前は、1986年から産業能率大学の社会人教育部門にいました。80年代から90年代にかけ、企業の人事システムは年功序列主義から成果主義への転換が始まった時代と重なります。その頃、多くの企業で入試難易度の高い大学の卒業生を採用しても使えない、ということが言われるようになりました。

そして1996年にある出来事に遭遇しました。それは大企業の管理職研修会でした。社員は超難関大学を卒業されている方々ばかりの集まりです。その研修で、本学が提供するプログラムの中でも難しいもので、かなり精緻に職場の問題解決を考えるというワークを行ったのですが、見事な回答をされた方がいました。

私とコンサルタントの2人で、その方に内容の素晴らしさを伝え、職場に戻られたらぜひこの内容を実行してください、と話しました。ところが、その方はなんと「いえ、私はやりません」と言われたのです。

「これは研修のためだけの回答で、職場でこんなことをやったら私は嫌われ者になります」と。それを聞いて愕然としました。研修でいくら素晴らしい回答を作っても、一生懸命に取り組む姿勢が無ければ意味がないではないかと思いました。

そんなことがあってから、キャリア教育がこのような現状への解決策になるのではないかと考えたのです。そんなときに、大変示唆的なお話をある高校の先生から伺うことができました。

それは、今の若者は「いい日旅立ち」症候群だということです。良い職場ばかりさがしているし、そういう職場が存在すると思っている。理想の職場が始めからあるわけではなく、何事も一生懸命にやっていくと面白くなるものだというお話でした。

その話を聞いて、私は物事に一生懸命に取り組む、その姿勢を育てることが一番のキャリア教育だと思いました。まさにこれが先ほどの研修に参加した企業の方に欠けていたもので、かつ私たちが大学教育の中で学生に身に付けさせなければならない姿勢や力だと考えたわけです。そこで、キャリア教育の視点で経営学部にキャリア教育接続入試を実施することにしました。

(2) キャリア教育接続入試

キャリア教育接続入試というのは、受験資格として高校時代にキャリア教育による成果物を保持していることを求める入試です。日本の高校では、総合学科ではキャリア教育を熱心に行っていますが、普通科では文科省からキャリア教育をしなさいと言われていながらも、実態はほとんど行われていません。従って普通科の学生がキャリア教育接続入試を受けるためには、本学のキャリア開発プログラムを受けないと受験できないという仕組みになっています。

2. PROGテスト実施の目的と検証

(1) 本学事例からの問題提起

さて、本学はPROGテスト（試行版、β版）を導入して、入試チャネル別に学生のジェネリックスキルを調べました。なぜ、そうしようと考えたのか。

今、大学はユニバーサル化しています。一部の難関大学を除いて多様な学生が大学に入学しています。そのため大学は多様化した学生を多面的に評価する必要があるのではないかと考えたからです。

そして調査対象学部を経営学部にしました。産能能率大学には経営学部と情報マネジメント学部の2学部がありますが、経営学部のみを調べた理由は、1つの学部の方が結果が分かりやすいのと、男女比率が5対5であったこと、入試チャネルがAO、指定校推薦、一般、

センター、キャリア教育接続入試に限定され、スポーツ推薦や内部進学などもないので、比較的に絞られたルートだということです。

しかも、キャリア接続入試で入学した学生を調べることで、高校のキャリア教育がジェネリックスキルを育てているかどうかも検証できるのではないかと思い、この入試形態がある経営学部を選びました。

これからその結果についてお話しするわけですが、そこには次のような問題提起を含んでいます。

1. 指定校推薦入試はAO入試よりも機能していると言えるのか。

2. AO入試は選抜機能を果たしているのか。

3. キャリア教育接続入試によりコンピテンシーを育成することは可能か。

4. これまでの価値観による学生評価の弊害

これらの問題意識を頭に置いてお聞きいただければと思います。

(2) 入試チャネル別に高校までのジェネリックスキルを検証

PROGテストの実施の目的ですが、今回は特にリテラシーを支えるコンピテンシーに注目しました。コンピテンシーの測定を意図して、これまでさまざまな入試形態を、意欲と姿勢を問うAO入試を含めて作ってきたのですが、実際にそういう狙い通りの学生が入学しているかどうか、を検証してみたのです。

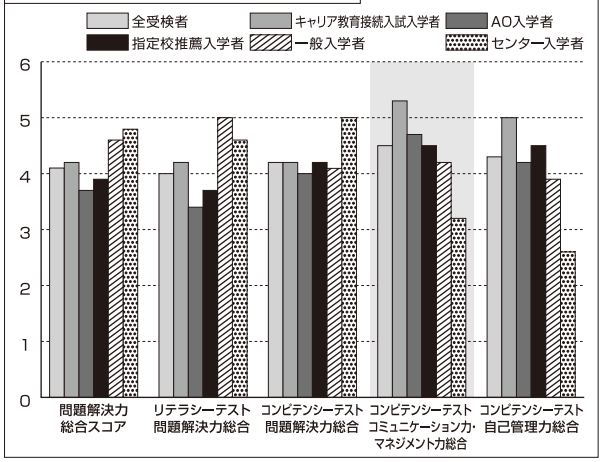
図表1はPROGテストを受検した2011年度入学者のスコアです。一番左のブロックは、2番めの「リテラシーテスト問題解決力総合」と3番めの「コンピテンシーテスト問題解決力総合」を平均したものです。左からの3項目を入試チャネル別にみると、一般入試とセンター入試による入学者の結果がかなり高い。また「コンピテンシーテスト問題解決力総合」は、センター入試のスコアが特に高い結果となりました。

キャリア教育接続入試による入学者は、全体の中でも各項目で高い結果が出ていますが、特にコンピテンシーテストの「コミュニケーション力・マネジメント力総合」の項目や「自己管理力総合」のスコアが高い。またAO入学者もこの2項目でスコアが高く出ています。

一方でAO入学者は、「リテラシーテスト問題解決力総合」、つまり知識の活用能力では最下位です。指定校推薦入学者がその次でした。

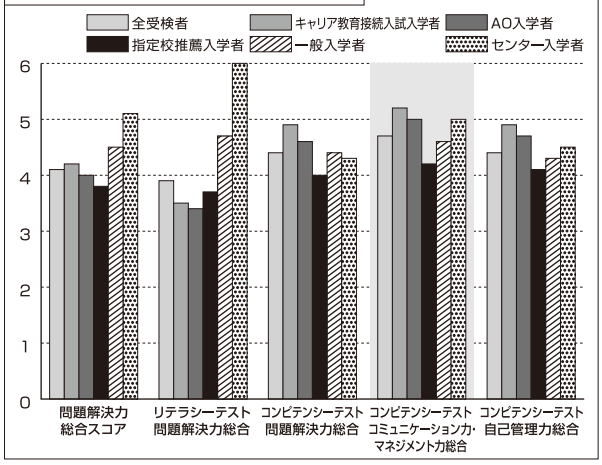
このように、コンピテンシーについては、キャリア教育を受けてきた学生はPROGテストで測っても高い結果がでたと言えます。受検は入学直後の4月なので、本学の教育はまったく反映されていません。高校までの教育の成果と考えられます。

図表1 2011年度入試チャネル別スコア



次に、**図表2**の2010年度入試チャネル別スコアを見ると、センター入試で入学した学生はリテラシーが非常に高く、キャリア教育接続入試の学生はコンピテンシーが高くなっています。

図表2 2010年度入試チャネル別スコア



グラフにはありませんが、男女比較をすると、女子はコンピテンシーが高く、男子はリテラシーが高いという結果になりました。

キャリア教育接続入試に関しては、入学者の出身が総合学科と普通科の比率がちょうど5対5でしたので、高校種別による違いを見てみると、キャリア教育を行うことが一つの目的でもある総合学科では、リテラシーが普通高校より少々低く、コンピテンシーは普通科より高くなっています。

(3) リーダー的な学生のスコア

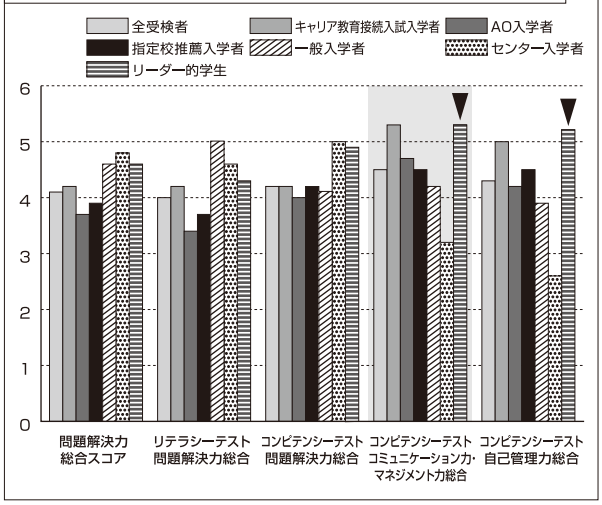
図表3は、2011年度の初年次ゼミの中でリーダーシップのある、あるいはリーダーとして期待できる、影響力の

ある学生です。そうするとリーダー的な学生のコンピテンシーは全体と比べて高く、特に「コミュニケーション力・マネジメント力総合」や「自己管理能力総合」で高いという結果がでました。

「リテラシーテスト問題解決力総合」はそうでもありませんが、全体的にどれをとっても非常に高く、全体としては彼らの傾向が表れていると思います。

これからみてもPROGテストのコンピテンシーは、こういう学生の現状を測定できているということを示しているわけで、今後その分析結果をどう活かすかが課題です。

図表3 2011年初年次ゼミでのリーダー的学生のスコアとの比較



3. 従来の価値観による学生評価の弊害とPROGの活用法

これまでの価値観による学生評価の弊害についてです。たとえば、これまでは「この学生の髪型が悪い、英語の成績が悪い、どうして入学させたんだ」とか、「センター試験の入学者は成績が良いから優秀だ」、「指定校推薦入学者だからまじめだろう」と言われることが多くありました。

しかし、こういうことだけで学生をみてよいのかということです。

ここに産能太郎君と能率次郎君という2人の学生がいます。プロフィールは2人ともAO入試入学で、選抜の評価はまったく同じです。ほぼ同じランクの中堅都立高校出身で、高校成績もほぼ同じ。どちらも部活は体育会系。本学の入学前学力確認テストでは、英語は産能太郎君が高く、国語は能率次郎君が高かったという結果でした。ところが2人のPROGテストのスコアは産能太郎君がリテラシー、コンピテンシーともに7で、能率次郎君はほとんどのスコアが1でコミュニケーション力だけ3でした。

もし、従来の価値観だけの評価だけなら、2人は似たような者として評価されていたはずです。ところがPROGテストによって、2人の育成方法は一変しました。つまり、今後の初年次ゼミの中で能率次郎くんをどう育てていくか、を課題にできました。彼のスコア1を、どうやって2に、3にしていくか。できれば卒業までに7に近づけたいわけです。

こうしたことから、PROGテストの活用方として以下のようなことを考えました。

1. 初年次ゼミでのクラスまたはグループ分けに利用する。
2. コンピテンシーの低かった学生と高かった学生を意図的に交流させる。
3. AO入試の視点にコンピテンシーを測る尺度を検討する。

では、次にPROGテストを受けて自分はどう感じたか、納得したのか、という点を本学の学生から少しお話しさせていただきます。

4. 学生報告「ジェネリックスキルと自己開発」

経営学部2年 **池上 沙希さん**

(1) 普通科高校出身の私がキャリア教育接続入試を選択した理由

産業能率大学経営学部2年の池上沙希です。大学では座学と実学を繋げるアクティブラーニングを実際に受けていて、それによって日々成長できていることを感じています。そこで本日は学生の視点からみたジェネリックスキルの重要性と自己開発との関わりについてお話ししたいと思います。

先ほど林さんから「キャリア教育接続入試」の説明がありましたが、私がなぜこの入試方法を選択したかについてです。

この入試形態は、通常キャリア教育を受けてきた総合学科の学生が多く受験していますが私は普通科高校で、しかも生徒の学力があまり高くなく、大学からの評価も高くない高校に通っていました。しかし私には「大学に行きたい」「大学でマーケティング開発の勉強をして将来は食品企画をしたい」という夢がありました。そこで大学をめざしましたが、学校に対する評価が低いので指定校推薦で入学できる大学には、希望する大学がまったくありませんでした。私は高校の学校名ではなく、「私自身の想いを評価してもらいたい」「そのために努力してきたプロセスを評価してもらいたい」と考えており、そんなときに産業能率大学のキャリア教育接続入試のことを知ったのです。

私は実際にキャリア教育接続入試を経験してそこから

多くのことを学びました。この入試（プレゼンテーション選考）で、私は「『餃子の王将』に、女性のお客さんを呼び寄せるための私のお店改革案」をプレゼンテーションしました。これを完成させるにあたって、実際に王将の店舗に何度も行って改善点はどこなのか、女性のお客さんが喜ぶポイントはどこなのかなどを考えました、このプロセスを通じて問題発見力や、多くの情報の中から確かな情報を見きわめる取捨選択の情報分析力・情報収集力、それから自分だけの企画を作る企画立案力や構想力、最後にそれをプレゼンテーションとして形にする自己表現力など、今振り返っても、この受験を通して多くの力が身に付いたと感じます。

そして、この受験方法で合格したことで、自分にはこれらの力が着実に付いていると感じたこと、それを他者が認めてくれたことが大きな自信につながり、今の自分の糧となっています。

(2) 自己開発とPROGテスト

産業能率大学では普段から授業内で、自分のキャリア設計について考えるキャリアプランシートの作成があります。それによって、いやになる程自分について考えさせられるのですが、自分がどんな能力を持っているのか、強み弱みどころか自分自身を把握できていない段階で、そんな将来のことを考えても迷走するばかりでした。

そんなときに、このPROGテストを受検し、客観的データで今の自分を知ることで、今の自分に足りない能力、強み・弱みは何かが見えてきました。そうすると、10年後のなりたい自分・将来の自分になるために今何をすべきなのか、というアクションプランを立てることができるようになったのです。

では私のPROGテスト結果をご紹介します。ここから何が分かったのかというと、私の強みはリテラシー能力とコミュニケーション力、マネジメント力だということです。これらのことに気付いたので、たとえばグループワークの授業ではこれまでメンバーを引っ張っていくような役割を担っていたのですが、今度はメンバーがグループワークをやりやすいような環境づくりに徹してみようというように、一歩先に進むためのアクションプランが立てられました。

反対に私の弱みは問題解決能力でした。そこでリテラシーで得た知識をもっとアウトプットするような行動をしてみよう、そういう意識を持とうというアクションプランを立てることができました。

(3) ジェネリックスキルが活かされた経験

次にジェネリックスキルを活かせた経験を紹介します。

その私の経験は「ゼミ対抗 球技大会」の開催です。なんだそんなことかと笑わないでくださいね。私はこの球技大会の企画に携わって多くのことを学ぶことができました。発端はある一人の男子学生の「学校行事やサークルだけでなく、学年全体で一から何かを企画したら絶対楽しいよ」という思いつきで始まり、それに賛同した人たちで球技大会の実行委員会組織を立ち上げ、1年生のときに約3か月以上の準備期間をかけて実現しました。私は今2年ですが、今も活動を継続していて第2回が終了したところです。そして次回の第3回に向けて活動中です。

実際、球技大会の実現には多くの問題があり、それを越えていくための能力が必要になりました。具体的には約16人いる実行委員は仲よしグループというわけではないので、彼らと一緒に進めていく協働力が必要です。話し合いの中でさまざまな意見が飛び交いますが、そのときに言ってはいけない言葉と言うべき言葉があり、そういう自分をコントロールする感情抑制力や、毎週のミーティング等の実現のためには何らかのアクションを起こす実行力と行動持続力が必要になってきました。また持続することで参加者からの信頼も得ることができましたし、球技大会実行委員だけでなく、他の各ゼミをまとめる統率力も必要でした。

球技大会の実行に携わることで、これらの統率力・行動持続力・実行力・感情抑制力・協働力というジェネリックスキルの重要性をすごく実感しました。

そして先ほどのPROGテストの結果から、何が自分の得意分野なのかを理解していたので、どの役割を担うべきかを考えることもできましたし、自分なりの目標を持って運営実行に携わることができました。

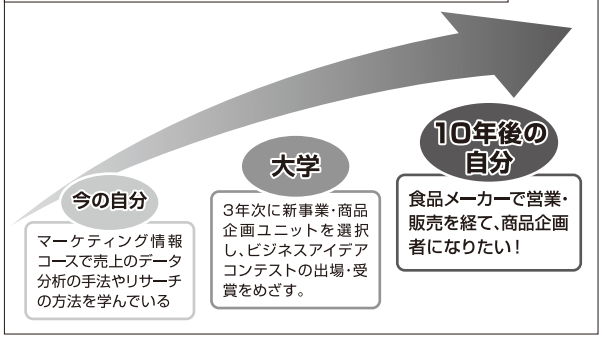
また、この球技大会に携わったことで、これまでに学んだことを机の上だけでなく、形にする、アクションしていく体験もしました。

特に今回、役立った授業として「ビジネス文書の作成」があります。この授業は報告書や企画書の作り方、社外・社内文書の書き方のほか、実際に学生向け新サービスを私たち学生自身が企画して企画書にまとめるというものです。その授業で得た知識を私たちは球技大会の運営実行の中で活かすことができました。座学で学んだことを実際の活動に活かせたことで、授業が今までより楽しいと感じました。このように感じながら学ぶことが私たち学生にとっても身になりますし、大切なのではないでしょうか。

(4) PROGテストを通して

最後に、私はこのPROGテストを通じて自分の強み・弱みが分かり、自己の再発見ができました。また今の自分の優れている部分をもっと活かすために何をするのがいいか、どんなアクションをこれから起こしていくのがいいのか、日々問題意識を持って物事に取り組むようになりました。またそれによって自分のキャリア設定をより明確にすることができました。

まず私の将来の夢である「食品メーカーで商品企画の仕事がしたい」という思いをかなえるためにはどんな能力が必要なのかを考えます。そしてPROGテストで分かった、今の自分が持つ能力と照らし合わせます。そうすることで今後さらに伸ばしていくべき能力、つまりやるべきことが見えてくるようになりました(**図表4**)。

私には問題解決力が足りないとあったので、もっと経験を積んでいけるような、具体的アクションを起こせるようなビジネスアイデアのコンテストへの出場と受賞をめざす、というプランを立てました。大学卒業後の10年後の自分を見据えて今やるべきことをやる、そんな風に常にスキルアップできるよう精進していきたいと思っています。

図表4 PROGテストを通して立てた私のアクションプラン